OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	FREDERICK DOUGLASS AND HIS STRATEGIC APPLICATION OF MASCULINITY TOAFRICAN AMERICAN LIBERATION
Author(s)	朴, 珣英
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49216
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

氏名	朴（パク） 珣英（スニョン）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学位記番号	第　２１５０７　号
学位授与年月日	平成 19 年 6 月 28 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	Frederick Douglass and His Strategic Application of Masculinity to African American Liberation （フレデリック・ダグラスの黒人解放運動におけるマスキュリニティ戦略）
論文審査委員	（主査） 教　授　仙葉　　豊 （副査） 教　授　ジェリー・ヨコタ　　准教授　森　　祐司

論 文 内 容 の 要 旨

今日のアメリカ合衆国における黒人・白人間の人種的対立や緊張関係の主たる要因は、歴史的にみると建国当初から制度的矛盾をはらみつつも存続してきた黒人奴隷制度にある。19 世紀は 17 世紀の植民地時代から存在する黒人奴隷制度がさらに発展し強化された時代であった。その一方で、南北戦争によって奴隷制度が完全な廃止へと導かれた時代でもあった。このように 19 世紀は南北戦争を分岐点に、黒人にとっては零落状態から人間性を回復しながらも、根強く残る差別と苦難を乗り越える方策が必要とされ、白人にとっては従来自明の理とされてきた白人至上主義に陰りが射し、新たな対抗言説を生み出さねばならないという、文字通り激動の時代であった。そして当時の政治的・社会的位置づけにおいて、また現在までの黒人解放運動（奴隷制廃止運動、黒人の権利獲得運動を含む）への影響において、最も傑出した黒人はフレデリック・ダグラス（1818-1895）であろう。ダグラスはアメリカ南部プランテーションに奴隷として生まれ、20 歳の時に逃亡し、その後、自由の身分を獲得し黒人解放運動に一生をささげた人物である。

奴隷制存廃に揺れる 19 世紀中期は「野蛮で暴力的な黒人像」と「臆病な黒人像」が白人の都合に応じて選び取られ、黒人男性のマンフッド、すなわち人間性と男性性は完全に否定されていた。そのような言説がまかり通っていた時代であるからこそ、ダグラスは黒人の解放と社会的地位向上のためには黒人男性のマスキュリニティを強調することが有効であると考えた。現在、ジェンダー論的観点から、ダグラスは男性優位主義者であるという批判もある。しかし 19 世紀という時代背景と女性の地位向上運動へのダグラスの積極的関わりを考えると、現代の視座から単純にダグラスを批判することはできない。

19 世紀アメリカにおける黒人男性のマンフッドの否定は、黒人女性のウーマンフッドの否定とも表裏一体の言説であり、黒人全体の人間性の否定へとつながっていた。よって今日におけるフェミニズムやジェンダー論による「黒人女性を抑圧する黒人男性像」的解釈と同列に扱うことは不可能である。19 世紀の黒人・白人間の人種問題は同時代においても、ときにジェンダーの比喩のフィルターを通して論じられることがしばしばあった。すなわち黒人男性が「女性化」されることで、人種全体としての「黒人」が「女性」と規定され、その対極として男女を問わず「白人」が「男性」と社会的に位置づけられたのである。このように人種をジェンダーの位置づけで捉えたとき、必ずしも白人女性

が白人男性に抑圧されているという構図ばかりでなく、実は人種としては「男性」である白人女性が白人男性と共に、「女性」である黒人全体を貶める趨勢に加担していたとも考えられる。

前述のような人種のジェンダー化を背景に、本論文では黒人全体の地位向上に、ダグラスの用いたマスキュリニティ言説がいかに攻治的に有効に働いたかということを探る。決して黒人男性の優位性を立証することが目的ではない。既往の研究ではほとんど扱われることのなかったダグラスのマスキュリニティ戦略に着目する。そして、ダグラスがいかに巧妙なレトリックを用いて黒人男性の「存在しないはず」のマスキュリニティを構築したかを論じる。本論文はダグラスのマスキュリニティを利用した黒人解放運動の手法を中心に、ダグラスの歴史的意義と今日的意義を明らかにしようとするものである。

本論文は４章からなり、以下のように論じられる。第１章、第１節ではダグラスの最初の自伝である『ナラティヴ』（1845）における２つの挿話、「アント・ヘスターの鞭打ち」と「コウビーとの戦い」に着目する。これらの記述の分析を通して、白人による黒人男性のマンフッド否定が実は黒人女性のウーマンフッドの否定と表裏一体であることを示し、ダグラスが自身のマンフッド回復の逸話を通して、活動家としての初期の段階で曖昧さを残しながらも意図的にマスキュリニティ言説を形成したということを明らかにする。第２節では前節で示されたダグラスのマスキュリニティ言説の曖昧さが、黒人の力による抵抗を極端に恐れる白人読者への配慮と、さらに指導者であったウィリアム・ロイド・ギャリソンの無抵抗主義への配慮からであった点を指摘する。そしてダグラスがギャリソン派から決別するに至った経緯を、当時のマンフッドの要件でもあった政治的・経済的・精神的自立の観点から考察する。ダグラスとギャリソンの間に決定的な不一致を生み出したのが、当時の宗教的・文化的イデオロギーであった「アメリカン・ジェレマイアード」に対する態度の差にあったということを論じる。

第２章、第１節ではギャリソンとの決別の一因ともなった合衆国憲法に関するダグラスの解釈の変化を考察する。そしてその憲法を起草した建国の父祖たちを、当時の望ましいマスキュリニティの体現者とする社会的コンセンサスを踏まえて、いかにダグラスがアメリカ建国の基本理念を援用することで黒人解放における暴力の使用を正当化し、暴力とブラック・マスキュリニティとを結び付けたかを論じる。第２節ではダグラス唯一の中編小説「英雄的な奴隷」（1853）に焦点を当てる。これは黒人解放への姿勢が最も闘争的で過激であった 1850 年代のダグラスを特徴付ける作品である。アンクル・トムに代表される黒人の女性化のステレオタイプを反証し、白人にとって「存在しないはず」のブラック・マスキュリニティを証明して見せたのが、この小説である。作品中の建国の理念援用は支配文化の権威に回収されていく概念的な罠も存在するが、いかにダグラスがその危険を回避するために、建国の父祖のイデオロギーを「未完了の独立革命」という黒人解放のイデオロギーに変容させたかを、レトリックの分析を通して論じる。合衆国の法的枠組みの範囲内で憲法を遵守する思想のもと黒人解放を「未完了の独立革命」と位置づけることは、後の 20 世紀の黒人指導者である W・E・B・デュボイスや公民権運動を指揮したマーチィン・ルーサー・キング Jr.らに先んじるものであった。

第３章、第１節では南北戦争の勃発により、新たな局面を迎えることとなったダグラスのマスキュリニティ言説を考察する。ダグラスは戦争開始と同時にいち早くその大義を奴隷解放と位置づけた。第１節ではダグラスが南北戦争を機に、ブラック・マスキュリニティ言説における武力行使を政治的に安全性が確認された形へとつなげていった過程を考察する。奴隷解放（予備）宣言を経て、黒人連隊編成へと、黒人にとって歴史的事件が起こるなか、いかにダグラスが 50 年代には構築し得なかった、時宜を得た明確なマスキュリニティ言説を打ち立てたかを論じる。第２節では黒人の白人への抵抗の言説としてのマスキュリニティが、時に黒人男性のマンフッドの強調として現われたという議論を踏まえ、黒人女性もまたブラック・マスキュリニティの構築に寄与した事実を明示する。その上で、３章までに論じてきたダグラスのマスキュリニティ言説がいかに関わるのかを論じる。

第４章、第１節では既往の研究では南北戦争後は失われたと考えられてきたダグラスのマスキュリニティ言説が、実は彼の晩年まで一貫して存在していたことを指摘する。南北戦争後、再建期を経て南北の和解が成り、南北戦争の大義は次第に失われ、その記憶をめぐる議論から黒人は除外されていった。そういった状況の中で、ダグラスが著したハイチ独立の指導者であるトゥサン・ルヴェルチュールに関する未発表の原稿と、黒人雑誌に掲載されたルヴェルチュールに関する記事をもとに、ダグラスのマスキュリニティ言説の変容をたどる。すなわちダグラスはトゥサン・ルヴェルチュールに代表される理想的黒人のヒロイズムを 18 世紀サント・ドミンゴ（現ハイチ）に限定されたもの

から、100 年後の世紀転換期のアメリカに敷衍させたのである。第２節では黒人女性の問題と関連させ、黒人男性のリンチにおけるジェンダーやセクシュアリティの観点から、ダグラスのアイダ・B・ウェルズとの関わりを通して、彼の最晩年のマスキュリニティ言説を明らかにする。また 1893 年のシカゴ万博においてアメリカの黒人が排除された事実に対しダグラスが著した文書をもとに、ダグラス最晩年のマスキュリニティ言説を探る。

以上のような議論を踏まえ以下の結論に至る。ダグラスのマスキュリニティ言説は、彼の論じるマンフッドという言葉から想起されるジェンダー論的考察のみによって明らかになるものではない。彼のマスキュリニティ言説とは文化的に規定される「男らしさ」の規範を超え、「人間性」にまで広がりを持つものである。それは「人種」によってジェンダー化された視点を通し、また時に生物学的性差やセクシュアリティまでも戦略として用いることで、19 世紀のアメリカで抑圧されていたマイノリティ集団としての黒人全体を解放しようとする試みであった。そしてダグラスのマスキュリニティ言説は時を経ながら変容しつつも、その影響力は失われることなく、20 世紀の黒人指導者たちへと受け継がれていったのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、19 世紀後半のアメリカの傑出した黒人解放運動家であったフレデリック・ダグラス（1818-1895）の解放運動戦略を、「男性性」（マスキュリニティ）という観点から一貫性をもって論じたものである。彼の生涯を、代表的な作品である *Narrative of the Life of Frederick Douglass, an American Slave, Written by Himself*（1854）と *Bondage and My Dreams*（1855）などを中心にたどりつつ、彼の他のジャーナリストとしての活動や、最晩年の手稿研究などをからめて論じたものであり、バランスの取れた、しかも新しい知見を織り込んだ刺激的な研究として高い評価を与えられた。

第１章では、ダグラスの最初の自伝であった『ナラティヴ』における青年期の２つの挿話を分析しつつ、彼の「マスキュリニティ」に対する初期の考え方が分析され、彼の黒人奴隷としての弱さと無力感がその解放運動者としての出発点にあったことが示されている。ここでは、彼の「マスキュリニティ」の曖昧性が、黒人の力による抵抗を恐れる白人の意識や、無抵抗主義を奉じる他の運動家たちとの関連から丁寧に分析されているところが注目される。

第２章では、合衆国憲法に対する解釈を通じて、アメリカ建国の基本理念を援用することで黒人解放運動にある程度の暴力はやむなしとの意見に到達したダグラスの暴力とマスキュリニティの関連が論じられている。ここでは、ダグラスの唯一の中編小説である『英雄的な奴隷』（1853）とよく知られた『アンクル・トムズ・キャビン』（1852）との比較が、前者の男性性と後者の女性性との対比の観点から論じられているところが新鮮である。また、第３章では、南北戦争およびその後のダグラスの「男性性」が奴隷解放と黒人連隊編成などの歴史的事件との関連で述べられ、ブラック・マスキュリニティ言説における武力行使を政治的に安全な形態につなげていくダグラスの政治姿勢が指摘されている。

この論文で最も高く評価されたのが、第４章であった。この章では、サント・ドミンゴ（現ハイチ）の独立指導者だったトゥサン・ルヴェルチュールに関する、ダグラス晩年の書きものを丁寧に分析しながら、従来はあまり考察されることのなかったダグラスの最晩年の思想を新たに掘り起こしている。2004 年に完結したばかりのダグラスの未発表草稿のファクシミリ版を丹念にリサーチし、1893 のシカゴ万博における黒人排除への批判など当時の時代背景を織り交ぜたこの章の分析は見事なものである。

以上のように、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分価値あるものとみとめられる。